

## 戦後思想再考——始まりを問い質す（その3）

### 基調報告 『世界』初期号から『思想の科学』創刊号へ——二つのマガジンの〈始まり〉の点検

第35回大会（2010年）での発題を嚆矢とするこの連続セッション「戦後思想再考」だが、10回目を迎えた2021年度大会より「始まりを問い質す」という副題を付して、日本の「戦後思想」が始動する時点に焦点を絞り、「始まり」の形およびその思想的内実に入り込んだ検討を加えている。初回は、敗戦後初の「紀元節」（1946年2月11日）に東京大学総長・南原繁が行った講演「新日本文化の創造」を三島憲一会員が精査した。二回目のセッションでは、中野敏男会員が1946年1月に創刊された雑誌『世界』の初期号を俎上に載せて、「戦後論壇」なる言説空間の特質を解明した。

三回目の今回は、川本隆史会員が『世界』および『思想の科学』（1946年5月創刊）とを比較対照しながら、戦後の「始まり」が孕んでいた偏倚と複数の《未発の契機》の別決を試みようとした。会場配布したレジюме（A5判6ページ）では、三つの項目が立てられている。

#### I 『世界』初期号《つぶし読み》オンラインミーティングの軌跡

#### II 『世界』創刊時のキーパーソンとしての吉野源三郎（1899～1981）および田中耕太郎（1890～1974）の初志と工作活動

#### III 『思想の科学』創刊の周辺事情の探査

川本はIの作業で浮上してきた論点を、次の三つに絞った——①天皇制とデモクラシーの両立(?)はどのようにどこまで追究されたのか、②左右の“全体主義”を斥けようとする穏健な(?)中道路線の内実を吉野や田中らの活動に即して明らかにすること、③総じて、『世界』初期号における戦争責任や植民地統治への反省の不徹底さを別決すること。

基調報告を受けて中野敏男会員は、川本会員によって摘出された三つの論点が、ポツダム宣言に記された「条件」の第12項にある「日本国国民が自由に表明する意思に従って平和的傾向を有し、かつ責任ある政府が樹立されたときには、連合国の占領軍は、直ちに日本国より撤収する」との「約束」を念頭に置いて、そこに意図的に生み出されている「戦後言説」が胎んでいた問題そのものであると指摘した。すなわち『世界』初期号は、田中ら「同心会」メンバーの天皇制護持という共通の志を核として発刊され、それをデモクラシーと矛盾なく語ろうと意図して編集されているが故に、他方で戦争責任や植民地統治への反省につい

ては不徹底にならざるをえなかったということである。

引き続き三島憲一会員は、田中などが自然法の普遍主義を称揚しながら「日本だけは異なる」という議論で天皇制の維持をはかったことを、和辻の天皇制維持の議論にも触れながら紹介し、結局のところ、大多数の知的階層が教育勅語の呪縛下に留まり続けたこと、今でも「伝統と日本文化」という議論に京都で「市中感染」している人々が多いことを指摘した。

初見基会員からは、『世界』誌が当初押し出していた天皇制存続と民主主義を直結させた議論に、なぜ天皇制批判は打ち克つことができなかつたのか、また当時戦争責任・植民地責任の問題がほとんど主題化されていないのは何を意味していたのか、今後の課題としたいとの発言があった。

会場からは、氏名不詳氏より、社会生活の指導原理といった面をなぜ鶴見俊輔は棚上げしたのか、そして鶴見の思想と民間学との関係をどう捉えるかの質問があった。川本会員より前者に対しては、当時マルクス主義、日本共産党の力が強大だったこと、また論理実証主義という鶴見の立場から検証できない命題は扱わないといった姿勢があったのではないかと、後者に対しては、『思想の科学』はある意味、民間アカデミズムを目指していたとすることができる、との回答があった。

佐藤梓会員から、戦時中に利用された「神話」や「故郷」が戦後は否定され、それに「科学」が対置された面があると思われるが、川本会員が紹介した「デモクラシー」に対する「土民生活」（石川三四郎）という訳語には「神話」や「故郷」に親和性があると窺える、そこで、神話は現代にあってどう再生されうるのか、との質問が出された。これに対して川本会員より、石川三四郎には、「高天原の八百万の神」が日本のデモクラシーのルーツだといった発想のあった点が紹介された。